カントにおける範疇の発出法について

1951.5.27　　上山春平　（日塔）

一、提案：カントの範疇発出法を、彼の反省概念論の高度から、把握しなおすことができるのではないか。

（注）反省概念論とは、『純粋理性批判』の分析論の後に補論としてのせられている「反省概念の多義性について」という部分であります。従来あまり顧られていないように思われますので、私の提案に必要と思われる点を書き出してみました。

I. 反省概念論に関する諸見解

a. 一般的見解

ライプニッツ哲学に関する批判的説明にすぎない。

b. ヘーゲルの見解

一般的見解に比して、何ものかにこの点の行論が言及されている。

「カントは、先験的倫理学もしくは情緒的分析論の補論として反省概念に関する論説を附加えている。これは主観Anschauung と情感Verstand、もしくは存在Sein と概念Begriff の間に横たわる領域である。」（グロックナー版ヘーゲル全集, Bd.5, S.18）

（注）

	直観もしくは存在の領域	悟性もしくは観念の領域	感性もしくは概念の領域
ヘーゲル『論理学』	存在論	本質論	概念論
カント『純粋理性批判』	感性論（直観論）	反省概念の多義性について（反省論）	分析論（悟性論）

c. 吾々の見解

1. 反省概念論の主題は反省もしくは先験的反省 die transzendentale Reflexion od. tr. Überlegung である。
2. 従って、それをライプニッツ批判にすぎないと見做す見解は、その主題を捉えそこなっている。
3. ヘーゲルの見解は、その主題を正しく捉えてはいるが、『純粋理性批判』における反省概念論の位置を、彼の体系的構想によってゆがめて捉えている。ヘーゲルの『論理学』の体系においては、反省規定は、存在と概念との中間に位置するかも知れないが、カントにおいては、反省は感性と悟性の中間に位置するのではなく、感覚与件を対象とすることから、感覚より高い次元に属して位置づけられる。ヘーゲルが『論理学』において概念の立場を優位とし、存在および本質をそれに先行する段階と考えたのに対して、カントは『純粋理性批判』において反省の立場を優位とし、それを悟性に先行する段階とは考えていない。
4. 反省概念論は批判的立場そのものの反省作用を主題としている限り、批判の対象（感性、悟性）を取扱う感性論や分析論と同一平面上に位置することはできない。従ってその平面によって形成された体系から脱落して別枠という形をとらざるを得なかったのではあるまいか。それがライプニッツ批判に多くのスペースをさいたのは、批判的立場の成立における歴史的経緯を反映するものと考えられよう。

カントでは
この悟性と
反省との
関係が
正しくつかまれていない
ヘーゲルでは
正しくつかまれている

II. 反省概念論と先験的位置論

1. 反省 (Überlegung, reflexio)

「反省とは与えられた諸表象 Vorstellungen と各々一様な認識能力との関係の意識であり、この意識によってのみ、諸表象の相互の関係は正しく規定されうる。」(K.d.r.V., B.316)

2. 反省概念 (Reflexionsbegriffe)

「諸概念(諸表象)が一つの心性の状態 Gemütszustand において相互に関係しうる関係は、同一性と差異性、一致と不一致、内的なものと外的なもの、所与されたものと所与されうるもの(質料と形式)の関係である。この関係は諸概念(諸表象)が感性と悟性の何れの認識能力において主観的に すなわちそれらのもとでいかに正しく規定されうるか。」(B.317)

3. 先験的位置論 (transzendentale Topik)

「概念の論理的形式 logische Form ではなくて、概念の内容 Inhalt が問題となる場合、即ち物そのもの Dinge selbst が同一であるか異なっているか、一致しているか不一致しているか、等々ということが問題である場合には、物 Dinge は各々の認識能力、即ち感性及び悟性に対して二重の関係をもつことができる。そして物と物とが如何なる相互関係を結ぶべきかという仕方は、それらの物が属するこの位置 Stelle によって定まる。」(B.317)

「各々が一つの概念に、感性または純粋悟性において与える所の位置 Stelle を、先験的位置 der transzendentale Ort と名づけることを許してもらいたい。このようにして、いずれの概念にもその用法の異なるに従って与えられる所の位置 Stelle の規定、即ち、あらゆる概念に対して定める先験的位置の規則的な体系、に先験的位置論と云われよう。」(B.324)

(「このような先験的位置論をたて、従って反省概念の多義性にたずさわって、この有名なライプニッツは哲学の知性的体系を創設した。」B.326)

III. 先験的位置論と体系的位置論

先験的位置論 = 反省概念論 (B.324)　　体系的位置論 = 範疇論 (B.109)

範疇 ← 判断形式 …… 判断とは「諸表象の間の統一の機能 (Funktion der Einheit unter unseren Vorstellungen)」(B.94) である。

反省概念 …… 「与えられた諸表象の相互の間の関係 (ihr [gegebene Vorstellungen] Verhältnis unter einander)」(B.316)

[「先験的反省のみが扱うべきものは与えられた諸表象といかなる認識能力との関係のみがそれらの諸表象の間の相互の関係を決めうることができうるべきか」(B.317)]

1. 範疇は判断形式から導出されうる。(B.90〜109)
範疇は悟性が純粋思考 悟性は概念による認識の能力であり、概念による認識は判断である。故に判断機能は悟性機能に対応する。従って形式論理学の機能を見て判断形式から従来の範疇を導出することができる。

2. 判断形式は(単に形式論理学の要素として対象との関係を捨象する場合ではなく、先験的論理学の要素として対象との関係を念頭に入れねばならぬ場合)反省概念にとって規定されうるであろう。
「諸々の表象に関するあらゆる他の検査に先立って最初の問題は、その表象がどの認識能力に属するかという問題(この問題を解決するのが先験的位置論の役割であるが)である。」(B.316)
「あらゆる判断が反省を要する (alle Urteile bedürfen einer Überlegung, d.i. einer Unterscheidung der Erkenntniskraft, wozu die gegebenen Begriffe gehören)」(B.317)
「あらゆる経験的判断に先立って、諸々の諸概念(諸表象)を比較する。全称判断を下すためには、……同一性へ、特称判断を構成するためには差異性へ、肯定判断が成立しうるためには一致へ、否定判断が成立しうるためには不一致へ、等々、それぞれの到達するために。」(B.317 f.)
「先験的考察 (これは対象そのものに関する)に諸表象相互の経験的比較の可能性に対する探索をふくむ。」(B.318)

3. 故に先験的位置論は体系的位置論にまさし、そこで基礎づけるものと考えられるのではないか。
(之はカントの範疇論をアリストテレスの方向にずらせた解釈の仕方であるといえよう。また先験的位置論と体系的位置論、従って反省概念と悟性概念(範疇)との関係をディンゲルデイントへ反省範疇と構成範疇の関係にたぐらえる解釈であるといえよう。しかしながら必ずしもそうとは断言できない。)

4. カントは何故にこのような考えを貫かなかったのであろうか。